

むかしむかし。
まさかど おとこ
将門という男がおりました。

まさかど くに
将門は国からひどい扱いを受けている

のうみん
農民たちを助けようと

たたか
戦っていました。

じゆうにがつ
十二月のこと。平良兼、貞盛、源藤は国から将門を
たお めいれい
倒せと命令を受け、将門のいる村を襲いました。

とき
その時、将門の兵は数名しかいなかったため、

たたか
戦うことができず、

まさかど いのち
将門は命からがら逃げました。

さだもり まさかど ゆくえ
貞盛は将門の行方を追いましたが、

まさかど
将門はみつきりませんでした……。



まさかど
将門は、昔から仲がよかった

あらいいぞく
新井一族の助けをかり、

ひとし
人知れぬ山の中に館をたて

くらしていました。

まさかど
将門にとつてこの山中での暮らしは、

なん
何と静かな落ち着いた生活だったでしょう。

きび
厳しい冬が過ぎ、春が来ました。

うつく
美しい自然と秩父の人々の

やさ
優しさに触れ、

じよじよ
徐々に将門は冷たく閉ざした心を

ひら
開いていきました。

あらいけ
新井家にはそれはそれは美しい

「ききよう」という娘がおりました。

まさかど
将門はききよう姫をたいそう可愛がり、

たびたび館やかたによんでは

こと
琴を弾かせたり、舞まいを舞まわせたりしていました。

おお
大きな入道雲が秩父三山ちちぶさんざんにもくもくと

ふくれあがり、時折強い風かぜに交まじって、

さあつと雨あめが降り始めたある日の午後。

ききよう姫が将門の館まで急いでやってきました。

将門をとらえるための兵が城峰山を取り囲んでいることを知らせに來たのです。

「もはやこれまで」と将門は覚悟をきめました。

ききよう姫は将門の覚悟を知るにつけ、

なんとか助けたいと思いました。

その時、遊び場であつた

城峰山のどうくつを思い出したのです。

「将門さま、ここですんではいけません。城峰のどうくつにお逃げください。」

どのようなことがあつても表に出ませんように。

必ず、必ず将門様をお助けいたします。」

姫の祈るようなまなざしに将門はどうくつから出ないことを約束し、どうくつににげこみました

貞盛は将門の居場所を聞き出そうと
ききよう姫を捕まえました。

しかし、姫は将門の居場所を
言おうとしません。



貞盛は頭にきて姫を割り竹で
バシンバシンと叩きました。

それを見た姫の親は、姫に将門の
居場所をいうように言いました。

「もう、将門さまは太田部にはおりません。
城峰から万場へ逃げられました。」



それを聞いた貞盛は怒りながら
「早く将門を追え」と兵に伝え、
万場にいってしまいました。

姫との約束を守りどくつに隠れていた将門は
貞盛たちが万場へ行つたのを聞き
急ぎ、ききよう姫たちのもとへ戻りました。

しかし、貞盛の拷問で弱つた姫は
将門の無事な姿を見て安心したのでしよう。

ききようの花のような美しい笑みを
浮かべながら帰らぬ人になりました。

それから城峰山には
一本のききようの花も咲かなくなっていました。

